

# 橋上の町家 - 都市の新たな動線空間 -



## 00 計画概要

計画敷地は観光都市京都でも特に観光客が多い三条、四喜である。この地に流れる鴨川は京都の都市軸として空間を形成し、鴨川を挟んだ東西の地域間の移動には「橋」というツールを利用する以外に方法がなく、人の流れは一方で、鴨川は障害物ともいえる。近年観光都市に於いて重要視されている観光交通問題は京都でも多発しており、早急な解決が求められている。そこで本設計では、鴨川の河川空間というオーパススペースを用いた新たな動線空間を京都に計画する。河川空間を都市公園のように利用しやすい空間になることで、東西間の移動ツールが増え、都市における人の流れが多様になることで滞在人口の集中が緩和され、観光交通問題は解消される。



## 01 実態調査

計画敷地で重要視される観光交通問題について、実態の調査を行った。



### 【調査内容】

調査対象は平日及び休日、四喜大橋の工時時間帯の鴨川河川空間の歩行者数や交通渋滞が発生する原因を調査する。

### 【調査結果】

四喜大橋の通行人数は平日は13時頃、休日は毎日1万人以上が通行しており、四喜大橋の東西に位置する交通渋滞常時パンク状態であった。またこの地域に観光客が訪れる11時頃から18時頃に交通渋滞が多く発生しており、通行車両の増加や足元のパンク、公共交通機関（バス、タクシー）の利用者数の増加が原因として挙げられる。

### 【空間設計における目標値設定】

調査結果より、四喜大橋付近の観光客の増加の原因とした交通渋滞は11時頃から18時頃に発生する。このことから四喜大橋の通行人数を常時6000人程度に抑えることが、計画敷地における交通渋滞解消への目標値になると考えられる。よって、最大18000人が同時に利用可能な河川空間を利用した滞在空間を設計・提案する。

## 02 動線空間の計画

計画敷地である鴨川は、河川空間を歴史的な慣習文化「鴨川納涼床」のようによく利用されているが、日常では少し断絶された空間である。この空間を動線空間による東西の移動の拠点にすることで、この河川空間に人を呼び込み、この地域における人の流れを多様化させることを空間設計の狙いとする。動線は様々な繋ぎ方をすることで河川空間へ直接的に人を呼び込むことができる。

### 【動線動線計画】

鴨川の河川空間を利用した動線空間には、河川空間に繋がる既存動線の他に多くの動線を計画する。（配置は左図「計画配置図」を参照）

- I. 河川空間（河川敷と橋）に人通りを3つ繋ぎ、中間地点にある橋に滞在空間を設計する。
- II. 鴨川を挟んだ東西の主要観光地から直接河川空間に繋がる動線を計画する。主要道路によって遮られる動線（敷帯）は、主要道路を越えるような地下道とする。
- III. 周辺の公共交通機関から直接河川空間に繋がる動線（地下道）を計画する。



高低差や空間の差異から河川空間が周辺から断絶されている現状



動線空間を河川空間を交えた計画とすることで河川空間が周辺とのつながりを持ち始める



河川空間を訪れる人が増え、都市公園として様々なアクティビティが生まれる

03. 橋空間の計画



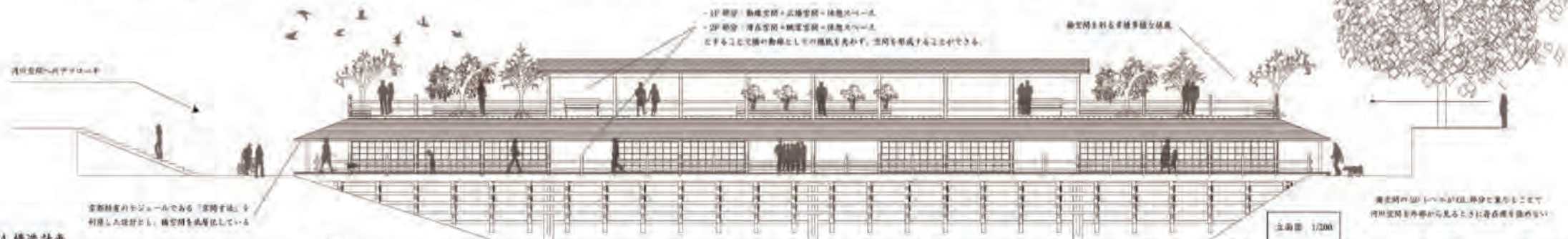
【町家建築の特徴的な構造形式を用いる】  
 連立フレームを構造体に加え、ここで動線空間として機能する。



【断面で構造を両化した設計】  
 構造体は全体で軸対称構造による。



【動線空間による透明な空間】  
 光・風・人の自然に誘われる。



1F 歩道・動線空間・広場空間・休憩スペース  
 2F 歩道・展望空間・眺望スペース  
 なることで橋の動線としての機能を高め、空間を形成することができる。

動線空間による透明な空間

橋空間の2Fレベルが、歩道と重なりことで、何層空間も同時に楽しめるように各層を設計する。

04. 構造計画

Ⅰ 橋造形式・構造システム

連立山形、門型ラーメンフレーム (c=150×300mm)  
 この橋造地周辺には、川や川の遊歩道とつながる歩道が数多く残存し、今もなお利用され続けている。本可成の橋造形式として特徴的なフレームの連立を採用し、動線空間としての役割を担う。

Ⅱ 貫式ラーメン構造 (柱 c=200×200mm / 骨 c=100×150mm)

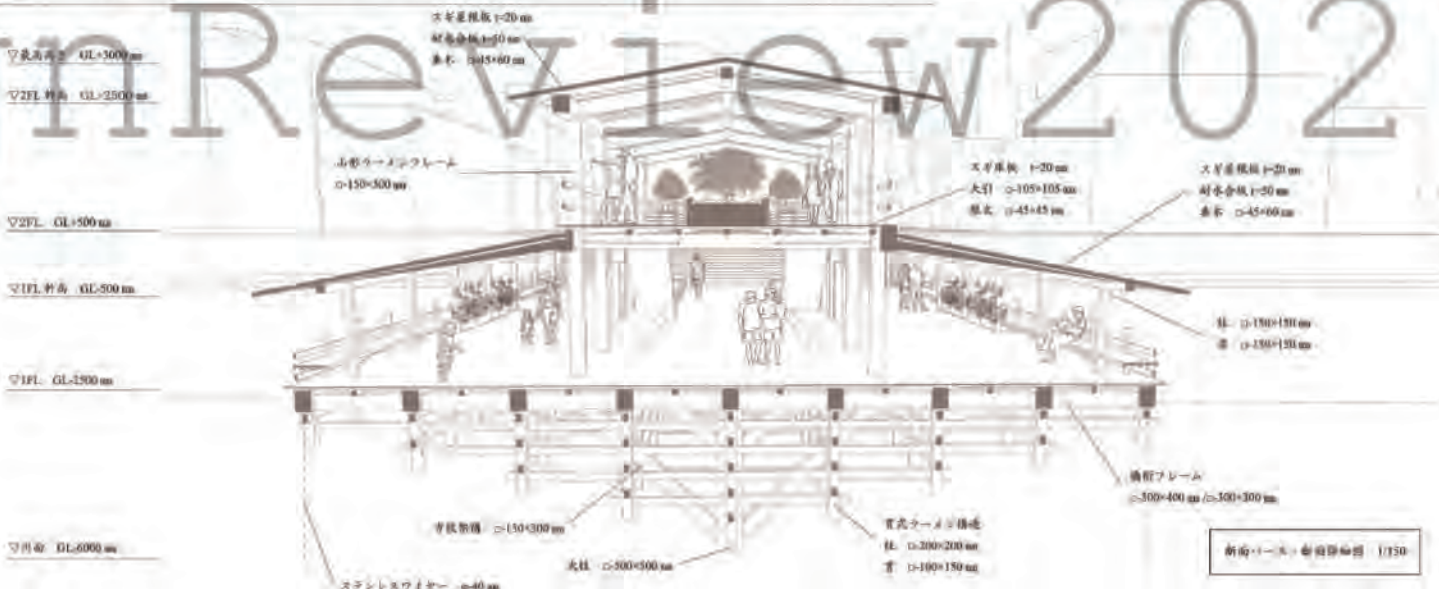
京都に古くから残存する寺社仏閣や京町屋には、橋造形式として貫式構造が採用されている。下部に基盤をいく形状とすることで橋造空間としての浮遊感を与える。

Ⅲ ステンレスワイヤー (φ=40mm)

この橋造空間を支える構造は視覚的に浮遊感を与えるため、川面に近づきにくくして視覚的にいく構造システムを採用している。そのため、水平力が作用した際にこの橋造空間を支える柱の柱脚を支点に発生する転倒モーメントをステンレスワイヤーの引張力で補完する。

Ⅳ 方杖架橋 (c=150×300mm)

本設計は空間の平面軸に連立ラーメンフレームを配置している。上部構造の鉛直力を効率的に下部構造に伝えるため、方杖架橋を採用することでそれを可能にしている。





Design Review 2020







